

現役を退くにあって、思い起こすこと

下 里 殖

授業もやっていないのに、皆さんこんなに集まっていたら、どうもありがとう。今年で辞めるのなら、是非一度、図書館で何か語ってほしいと言われ、一度はお断わりしたのですが、熱心さに負け引き受けました。

私が本校に赴任したのは昭和53年4月です。足かけ13年になります。前半は担任としての7年。後半はひょんなことから教頭としての6年です。

私は松本中学校に5年間お世話になったので、合わせて18年間。今までの人生の三分の一は深志にお世話になったのですから感慨深いわけです。

昭和18年に入学。太平洋戦争の真ただ中でした。130センチに満たない身長でした。仲間は200名足らず。私の入った1組の教室は今の保健室でした。昭和10年に建てられた建物ですから床もピカピカで、全員がはだしで歩いていました。校舎の周りの木も2米ぐらいの桜の幼木が多く、周辺は全部リンゴ畑。西側に僅かの道路、それも農道。北の奥の方は軍隊の演習場。丘の上に一本松があり、何か悪さをするとバツとして駆け足で「一本松往復」をやらされたものです。

なつかしいこととしては、今のプールのある所に鉄棒があり、その西側の桜の木の下は芝生になっていて、美術で写生の時間に出た時その芝の上で眠ってしまったこともありました。

昭和15年にみかげ石で、螺旋状に階段のつけられた立派な国旗掲揚台が作られました。戦後取り壊されてしまい、跡形もありません。プールの底になってしまったという説もあります。

昭和27年に「小林有也先生の胸像」が復元されました。松中時代は松本城内にあったものです。明治42年に小林有也先生の徳をたたえ、門下生が声をかけて胸像制作に着手。粘土・石膏での原型を作ったのは本校で美術を教えておられた武井真澄先生と彫刻家の北村西望先生でした。(このことについては、九十年史に詳しい) 昭和10年の学校移転の際に正門前に移り、昭和19年2月、胸像は軍に供出するために取りはずされ、第65回卒業生の卒業式の日(2.23)、併せてその壮行式が行われました。(今の藤森宮内庁長官もその時の卒業生のお一人です) 松中生は全員が登下校の際、この胸像に向かって敬礼をしたものです。供出されたあとも、

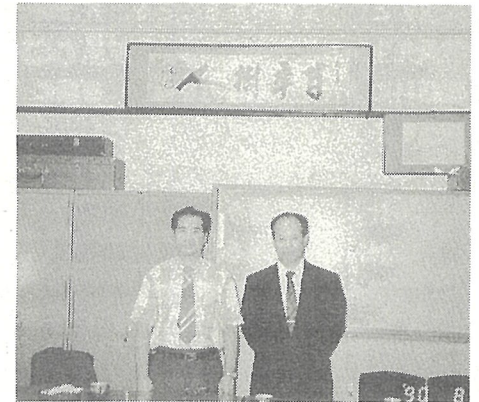
主の無い台座に向かって敬礼を続けました。戦後、この習慣はなくなってしまいました。

昭和27年に同窓会により胸像が復元しましたが、除幕式には武井・北村両先生をお招きし、盛大に式を行ったそうです。(百年史に詳しい) 除幕式のあと北村先生は浅間温泉に宿泊されました。その折、旅館の主人の希望で揮毫された色紙が、今ここにあるものです。(校長室に飾ってあります) 旅館から売りに出されたものを本校の卒業生が購入され、平成2年に本校に寄贈してくださいました。ここには「至誠一貫」「日に映ゆる像の除幕や秋ふかし」の句と、松の木の墨画があり、西望塑人と印してあります。

この一枚の色紙のような、ちょっとしたもののにも歴史があり、調べると面白いものです。胸像の裏側には、西望真澄(澄に同じ)と並んで銘があります。

「百季樹人」の額について

この額は校長室にかかっており、創立百年の年に和合松本市長が寄贈してくれたものです。この中で、「季」の字に少しこだわった。「季」ではないかと。記念式典の折に出された「百年特集」を見ると「季」となっている。昭和57年に見えられた小山洋校長は「学年だより」に「年」として紹介しています。書に詳しい英語科の宮下先生に調べてもらったところ、「季」は「年」と同じであるとのことでした。これを揮毫されたのは「リ・



春日校長と書家リ・クウモ氏 1990. 8. 24

クウモ」(李穀摩)というむずかしい字の方で、当時35・6歳の方。昨年突然に市役所から電話があり「これを書いてくれた台湾の書家が明日、松本を表敬訪問されるので貴校の書を見せてやってほしい」とのこと。私は当日は出張になっていたのですが、書と絵画を自学自習で今日の世界の名声を得てきた台湾の方。丁度名古屋で展覧会を開いた折、松本へ寄られるとのことでした。直接には春日校長先生がお会いになり、この書の出典はどこからかとお聞きしたところ、「ここからのもの」とのはっきりした書物はないとのこと。また、「季」で間違いなく、「ネン」と読むことも確認して下しました。あと、額の前で記念撮影もされました。

以前中国の春秋時代の書物「管子」の中に「一年之計、莫如樹穀、十年之計、莫如樹木、終身之計、莫如樹人、一樹一穫者穀也。一樹十穫者木也。一樹百穫者

人也』という文章があることを、井出前校長先生から教えられた事があります。国語科の務台先生の協力を得て、書棚にある管子(上)を見せてもらいました。

一年の計は、穀を樹うるに如くは莫く、十年の計は、木を樹うるに如くは莫く、終身の計は、人を樹うるに如くは莫し。一たび樹ゑて一穫する者は穀なり。一たび樹ゑて十穫する者は木なり。一たび樹ゑて百穫する者は人なり。という文があり、一年を目安とする計画は、穀物を植えるのが一番よい。十年を目安とする計画は、木を植えるのが一番よい。一生を目安とする計画は、人を植えるのが一番よい。一度植えて一度収穫のあるのは穀

物である。一度植えて十度収穫のあがるのは木である。一度植えて百度も収穫のあがるのは人である、とありました。

つまり、教育、人をつくるという作業は、一朝一夕に出来るものではなく、長時間を要し、大変難しい。しかし、天下のためには是非ともそれを長期的視野に立ってしなければならないものだ。それほど教育は重要で大切であるということでしょう。そういうことが、後世言い伝えられて、知らず、知らずの間に格言となり、李穀摩をして、こんな言葉「百季樹人」をつくらせ、和合市長の懇望に応じて揮毫したのではないかと推測されます。



【第97号】「起居有禮」

📅 2020.05.21 © 2016.08.30

深志第22回卒業30周年を記念して旧二棟階段の板から製作された「起居有禮」の説明を小林俊樹先生が書かれている（平成12年10月14日）。以下、これを参考にまとめてみた。

昭和24年（1949）6月5日、深志高校講堂で扁額「起居有禮」の掲揚式が行われた。長さ270cm、幅90cm、厚さ9cm、重さ200kgに近いケヤキ材の扁額である。これは、小林有也校長の35回忌を記念したものだ。

扁額の4文字の出典が問題だった。俊樹先生は、この真偽を究明する作業に入った。中国古代の詩経の言葉のなかには、4字熟した句は見た限りの典籍にはなかった。「有禮」と「起居」それぞれの語はあり、能書などにも「起居」の語は多いという。

小林有也校長はみだりに揮毫などした人ではない。原稿も書簡も少ない。ならば、どうしてこの字句ができたのか。

その謎が解けた。深志高校の校長室に現在保管されている小林有也の直筆書簡から、扁額の文字と4字句が生まれたのだ。当時の岡田甫校長や教師数人が鳩首思案の結果、書簡冒頭部分の「起居」を選び、小林有也の名の「有」と、書簡の追伸部分の「禮」を合成させた「有禮」が浮かんだというのだ。「いわば深志教師陣独創の箴言だったのである」と俊樹先生は結論づける。

「岡田校長流に言えば『真理至上善を探究する同心者としての師弟信頼と愛』（人間尊重）であり、行住坐臥心すべき、人間形成の根本義なのである」と、俊樹先生は説く。

この4字句をトレースして彫り上げたのが、彫刻家上条俊介氏（松中40回）であり、板代だけで当時5万円はしたという。

「起居有禮」は、「起居に禮有り」と読んでいいのか。「起居」は、「立ち居ふるまい。日常の生活」（『広辞苑』）とある。生徒の挨拶に対しては生徒より深く頭を下げて返礼したという小林有也校長の姿が浮かぶ。

講堂に行った折には、あらためて「起居有禮」をみてみたい。

筆者紹介： [小松 芳郎](#)